

④ 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。ただし、○数字は段落番号である。

①日本の住宅のドア、特に玄関のドアのあり方は、欧米とかなり違っている。日本の玄関のドアはたいがい外に開くのに対し、欧米では例外なくといっていいほど内側に開くのである。

②外開きか内開きかということになると、客を迎える際にはどうも内開きのほうがぐあいよさそうだ。外に開くドアは、ドアの開かれるのを待っている客を押しつけることになる。それに比べると内開きのドアは、ちょうど「いらっしやいませ。」とでもいうように、客を招き入れるように開くからはるかに感じがよい。

③それなのに、なぜ日本の玄関のドアは外に開くのか。その理由は明快で、日本人は玄関で履き物を脱ぐからだ。もし、ドアが内側へ開くと、脱いだ履き物にひっかかりやすい。もちろん広さにゆとりがあつて、きちんと整理されている玄関なら、何も問題はなからうが、現在の一般的な住宅の規模では、ひっかかるおそれが多い。もう一つの理由として、玄関土間の水洗いの問題も絡んでくる。玄関に流した水をスムーズに排出するためには、ドアの方向に向かって、土間に水勾配をとるのが最も常識的な方法である。こうすると土間は奥のほうが少し高くなるので、びつたりと閉まっているドアが内側へ開いていくと、ドアの下端が土間の高い部分をこすることになる。この難点を避けるためには、ドアの下に、土間の床の高さの変化に応じた隙間をつくっておくほかないが、そうすれば隙間風やほこりが入ってくる。

④これに比べると、外開きのドアは技術的処理がずっと楽である。子どもが脱ぎ散らかした履き物に、ドアがひっかかる心配をしなくてすむし、ドアに向かって水勾配をとれば水はスムーズに流れだす。土間の勾配を考えてドアの下に隙間をつくる必要がないばかりでなく、土間とドアの外のポーチの間に僅かの段差をつけて、戸当たりを兼ねさせると、風が吹けば風圧でドアが戸当たりにびつたり押しつけられることになるから、隙間風やほこりも効果的にシャットアウトできる。つまり、玄関ドアの外開きは「履き物を脱ぐ。」「土間を水洗いしたい。」「隙間風を嫌う。」という日本人の生活様式に適した、現実的な解決ということになろう。

⑤日本の現役の住宅設計者の中には、内開きの「いらっしやいませ。」感覚に断固としてこだわっている人もいる。ドアの下に隙間風を防ぐクッション材を取り付けるなど、いろいろと工夫をして内開きの玄関をつくり続けていて、その執念にはほとほと感心するのだが、ぼく自身はそれほどこだわらずに、これまでのところたいいは、現実的な解決として玄関ドアを外開きに設計している。というのは、内開きを「いらっしやいませ。」と解するのは、ある生活場面における一つの解釈であつて、場面を変えれば別の解釈も成り立つと思うからだ。

⑥内開きのドアは、体当たりによつて押し破られもするが、外からの力に負けずに押し返せば、開かない。外部からの侵入を防ぐために、ドアの内側に戸棚などを斜めに立てかけるのは、映画の場面によく出てくる。このようにすれば、内開きのドアは、例えば鍵を壊されても侵入を阻止できる。これを、外開きのドアの場合に置き換えてみると、侵入しようとする者の中にいる人が、両側からドアを引っ張り合うかたちになって、なんともさまにならぬ。内開きのドアの場合は、ドアを挟んで、外からの力と内からの力がぶつかり合う。それは引っ張り合うのに比べてずっと直接的な闘争の表現となる。内開きのドアは外来者に対して「いらっしやいませ。」と開くばかりでなく、ときには外来者を敵として頑固に拒みもするのだ。つまり、欧米人が内開きを選択したのは外敵の侵入を防ぐため、ともいえる。

⑦一方、日本はどうかというと、古来、ドア形式が全くなかったわけではないが、圧倒的に多かったのは引き戸である。相対する者のどちらの位置も侵さず、横に軽やかに滑って視界から消える、という引き戸の特徴は、自然に対しても近隣の人々に対しても親和的、融合的な日本人の態度にいかにもふさわしいといえよう。

⑧ドアについては内開き、外開きのどちらが日本的だともいいがたい。けれど、日本でドアが一般化した現在の状況を前提にして改めて考えてみると、履き物や水はけの問題を別にしても、ドアはどちらかといえば外に開くほうが日本の生活習慣に適しているのではないか、と思えてくる。

⑨自分自身が他人の家を訪問し、玄関の前にいるときのことを思い起こすと、ぼくは、ごく自然に玄関口からかなり離れて、ドアが開かれるのを待っている。これは引き戸であっても同じである。つまり、戸口から距離をとるのは、必ずしも外へ開いてく

